

大学生の孤独からみたカレッジ・インパクト

大久保 雅人

今日、大学教育をめぐる環境は変わりつつある。社会へ出る人材の育成機関としての大学の役割に注目したとき、学生を如何に評価するかが課題となっている。しかし、大学側は従来通りの学力テストによって、学生を評価することが多い。これを受けて、広い意味の学習の成果、ラーニングアウトカムによる学生の評価が注目される。A.W.アスティンは、ラーニングアウトカムを、大学と学生の関係から論じた。それは、既得情報を持った学生（Input）が大学環境（Environment）から影響をうけてラーニングアウトカム（Output）を出す、というモデルで表わされる。この影響がカレッジ・インパクトである。また、先行研究によってラーニングアウトカムの規定要因が「大学に対する満足度」や「人間関係」であることが特定されている。しかし、これらの規程要因は、大学生の内面的、心理的要因を軽視している。本研究では、「青年期の孤独感」を、大学生の内面的、心理的要因を構成する重要な一要素と位置づけ、「孤独感」と「大学に対する満足度」、「人間関係」の関係を明らかにすることを目的とした。

調査方法は、筑波大学の学生にアンケート調査を実施し、量的な分析を行った。質問項目には、プロフィールに関する設問、大学生活に関する設問、孤独感に関する設問、そして、独自に価値観に関する設問を加えた。孤独感に関する設問は、落合良行の孤独感尺度LSOを参考にした。LSOは「人間同士の理解、共感」、「自己の個別性」の二次元から構成される尺度であり、得点により、被験者を4類型に分類する。価値観尺度は、「理論」、「社会」の2尺度から構成されている。それぞれ、思慮深さ、社会との関わりに重きを置く価値観であり、その傾向が強いものほど、高く得点する。これらは、孤独感と表裏をなす価値観として、補助的に位置付けた。大学生活に関する設問は、因子分析により、「大学生活の満足度」、「友人数」、「教員とのコミュニケーション」の3要素が抽出された。LSO孤独感類型ごとに大学生活に関する設問項目の得点を比較した。また、孤独感によって分類した被験者を、さらに価値観によって加工し、類型ごとに大学生活に関する設問項目の得点を比較した。

結果、「大学生活の満足度」、「友人数」、「教員とのコミュニケーション」の3要素全てで孤独感に関して有意な差がみられた。特に、孤独類型の内、「人間同士は理解、共感できず、自己の個別性に気づいていない」群で、「大学生活の満足度」の得点が低く偏っていた。このことから、自己の理解者の欠如と「大学生活の満足度」の間に関係性があることが示された。ラーニングアウトカムの規定要因の一部が、孤独感と関わりがあることが示唆されたが、その因果関係を突き止めるには至らず、それを今後の課題とする。

(指導教員 歳森 敦)